



日本現代文學全集 65

橫光利一集

編集 伊藤 整・龜井勝一郎・中村光夫・平野 謙・山本健吉

講談社

日本現代文學全集

65

横光利一集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷

昭和36年4月20日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著者 横光利一

装帧 江征治

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

印刷 大日本印刷株式會社
製本 株式會社國寶社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便番號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

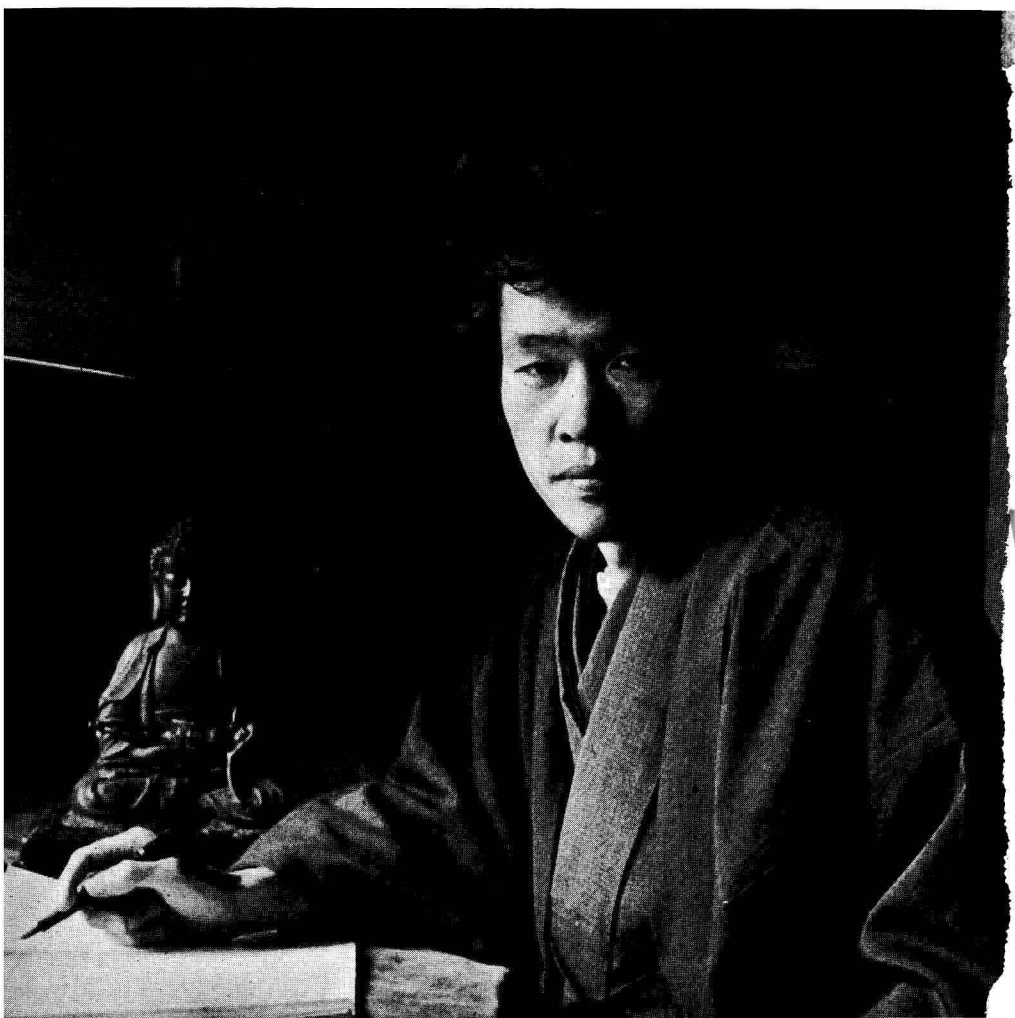
振替東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106650-2253 (2)

(文1)



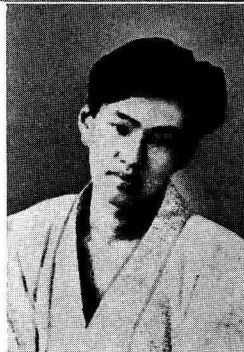
昭和十二年十一月
世田谷區北澤の自宅にて



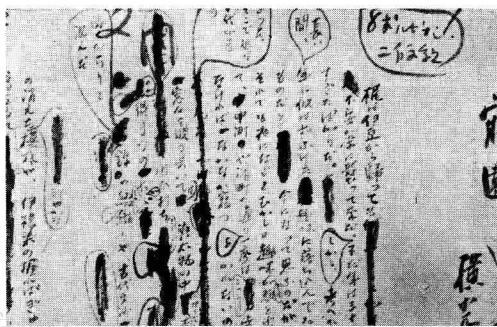
←昭和五年八月 北澤の自宅にて 利一 妻 千代 長男 象三

↑昭和二年六月 東北講演旅行の際
左から 菊池寛 川端康成 片岡鐵兵 利一 池谷信三郎

→大正五年 早大高等豫科文科在學中



「寢園」の原稿





←昭和十三年八月 湯殿山登山の時



→昭和十三年 中國旅行の際



→昭和十三年十一月 中國旅行の際

↓昭和十三年十一月 「紋章」上演の時 右は演出者の北村喜八





↑昭和十一年 渡欧の途中ヒ
ラミッド見物 後列左から
六人目 利一

↓昭和十一年 パリにて 左
岡本太郎

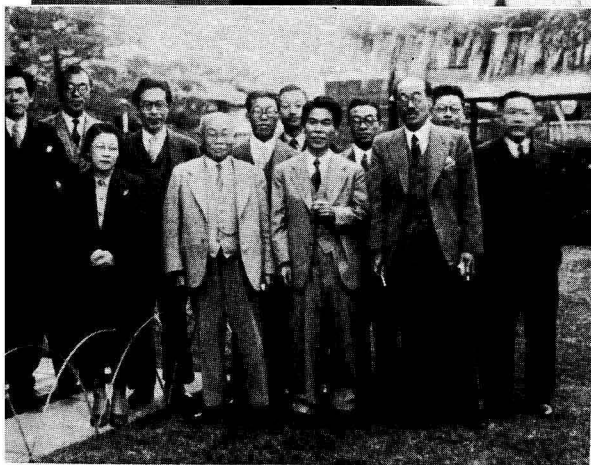
←昭和十一年 箱根丸船中
て



←昭和十一年 歸朝の途中 山陽ホテルにて



→昭和十五年
「宮澤賢治全集」刊行の祭
前河左から



→昭和十六年六月
文藝銃後運動中部講演會



↑昭和十六年五月
關西講
行の際 左から 利一
おいて 林美美子 岸田
二人おいて 吉川英治
おいて 久米正雄

→昭和二十四年十一月三十
多磨墓地の墓前にて 前
から四人目 妻 千代
目 長男 象三 六人目
塚友二 七人目 石川桂
後列左から二人目 保昌
四人目 八木義徳 五人
今官一





寒椿
しびいに雪の
明ふくて 横光

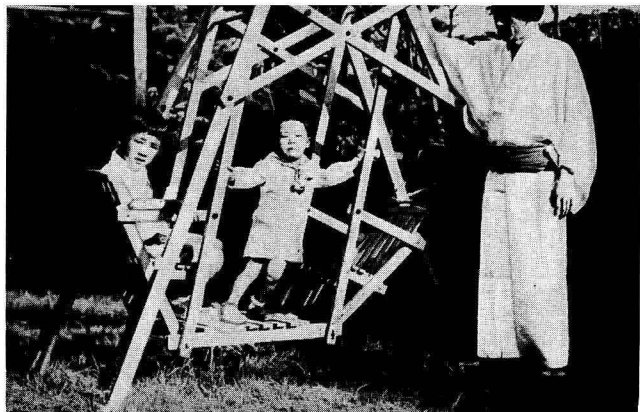
→自作自筆の俳句

↑昭和十年頃 十日會の席にて
前列右から 中山義秀 橋本
英吉 大鹿卓 利一 石塚友
二



→昭和十一年二月 渡欧の際 箱根
丸船中にて 右から二人目 高濱
虚子

↑昭和十年 「家族會議」執筆の際
左は挿繪を擔當した佐野繁太郎



→昭和十二年夏 北澤の自宅の庭にて
右から 利一 次男 佑典 長男
象三

↓昭和十二年 川端康成と将棋の手合せ(文藝春秋倶楽部に)



→昭和十二年秋



→ 中學生時代の利一と母
こぎく

大正五年 三重第三中學卒業の時
の利一



→ 父 梅次郎（慶應三年生れ）



→ 中學生時代



横光利一集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

蠅……………五

春は馬車に乗つて……………九

花園の思想……………二七

上海……………二七

機械……………二三

旅愁……………二六

夜の靴……………三七

純粹小説論……………四六

ある夜……………四九

北京と巴里……………四七

油（詩）……………八

俳句抄

作品解説……………河上徹太郎 四七

横光利一入門……………淺見 淵 四八

年譜……………四九

参考文献……………五二

橫
光
利
一
集

古里を

遠ざかりた

水なる

横光

蠅

一

眞夏の宿場は空虚であつた。ただ眼の大きな一匹の蠅だけは、薄暗い既の隅の蜘蛛の網にひつかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れてゐた。と、豆のやうにぱたりと落つた。さうして、馬糞の重みに斜めに突き立つてゐる藁の端から、裸體にされた馬の背中まで這ひ上つた。

二

馬は一條の枯草を奥歯にひつ掛けたまま、猫背の老いた馱者の姿を捜してゐる。

馱者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、將棋を三番さして負け通した。

「なに。文句を云ふな。もう一番ぢや。」

すると、廂を脱れた日の光は、彼の腰から、圓い荷物のやうな猫背の上へ乗りかかつて來た。

三

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が駈けつけた。彼女は此の朝早く、街に務めてゐる息子から危篤の電報を受けとつた。それから露に濕つた三里の山路を駈け續けた。

「馬車はまだかのう？」

彼女は馱者部屋を覗いて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう？」

亞んだ疊の上には湯呑が一つ轉つてゐて、中から酒色の番茶がひとり靜に流れてゐた。農婦はうろうろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかのう？」

「先刻出ましたぞ。」

答へたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出しましたな。もうちと早く來ると良かつたのぢやが、もう出ぬぢやろか？」

農婦は性急な泣き聲でさう云ふ中に、早や泣き出した。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立つてゐてから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馱者は將棋盤を見詰めたまま農婦に云つた。農婦は歩みを停めると、くるりと向返つてその淡い眉毛を吊り上げた。

「出るかの。直ぐ出るかの。倅が死にかけてをるのぢやが、間に合せておくれかの？」

「桂馬と來たな。」

「まあまあ嬉しや。街までどれ程かかるぢやろ。いつ出しておくれるのう。」

「二番が出るわい。」と馱者はぼんと歩を打つた。

「出ますかな、街まで三時間もかかりますかいな。三時間はたつぷりかかりますやろ。倅が死にかけてゐますのぢやが、間に合せておくれかのう？」

四

野末の陽炎の中から、種蓮華を叩く音が聞えて來る。若者と娘は

宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持たう。」

「なアに。」

「重たからうが。」

若者は黙つていかにも輕さうな容子を見せた。が、額から流れる汗は鹽辛かつた。

「馬車はもう出たかしら。」娘は呟いた。

若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、

「一寸暑うなつたな、まだぢやらう。」

「誰ぞもう追ひかけて來てゐるね。」

若者は黙つてゐた。

「お母が泣いてるわ。きつと。」

「馬車屋はもう直ぐそこぢや。」

二人は黙つて了つた。牛の鳴き聲がした。

「知れたらどうしよう。」と娘は云ふと一寸泣きさうな顔をした。

種蓮華を叩く音だけが、幽に足音のやうに迫つて來る。

娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。

「私が持たう。もう肩が直つたえ。」

若者は矢張り黙つてどしどし歩き續けた。が、突然、

「知れたら又逃げるだけぢや。」と呟いた。

五

宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指を銜へて這入つて來た。

「お母ア、馬馬。」

「ああ、馬馬。」男の子は母親から手を振り切ると、既の方へ馳けて來た。さうして二間程離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりやッ、こりやッ。」と叫んで片足で地を打つた。

馬は首を擡げて耳を立てた。男の子は馬の眞似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただ矢鱈に馬の前で顔を顰めると、再び「こりやッ、こりやッ。」と叫んで地を打つた。

馬は槽の手蔓に口をひつ掛けながら、又その中へ顔を隠して馬草を食つた。

「お母ア、馬馬。」

「ああ、馬馬。」

六

「あつと、待てよ。これは倅の下駄を買ふのを忘れたぞ。あ奴は西瓜が好きぢや。西瓜を買ふと、俺もあ奴も好きぢやで兩得ぢや。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。三十三年貧困と戦ひ續けた効あつて、昨夜漸く春蠶の仲買で八百圓を手に入れた。今彼の胸は未來の畫策のために詰つてゐる。けれども、昨夜錢湯へ行つたとき、八百圓の札束を鞆に入れて洗ひ場まで持つて這入つて、笑はれた記憶については忘れてゐた。

農婦は場庭の床几から立ち上ると、彼の傍へよつて來た。

「馬車はいつ出るのでござんせうな。倅が死にかかつてゐますので、早く行かんと死に目に逢へまいと思ひましてな。」

「そりやいかん。」

「もう出るのでござんしよな。もう出るつて、さつき云はしやつたがの。」

「さアて、何してをるやろな。」

若者と娘は場庭の中へ入つて來た。農婦はまた二人の傍へ近寄つた。

「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者は訊き返した。

「出ませんの？」と娘は云つた。

「もう二時間も待つてますのやが、出ませんぞな。街まで三時間か